

袋井市原川城跡・坂尻遺跡

(昭和63年度国庫補助事業)
(緊急発掘調査報告書)

1989・3

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、昭和63年5月20日～平成元年3月31日の期間に、袋井市国本字住吉 297-5 外地内で実施した原川城跡発掘調査事業に係わり検出された原川城跡・坂尻遺跡の発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、遺跡内で個人住宅の倉庫が建設されるのに伴い、国及び静岡県の補助金を受けて袋井市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、永井義博(袋井市教育委員会)を発掘担当者として、静岡県教育委員会文庫化課の指導を得て実施した。
4. 本報告書の執筆・編集は社会教育課 永井義博が担当した。
5. 袋井市教育委員会での事務は、社会教育課が担当した。
6. 調査資料は、すべて袋井市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 発掘調査に至る経過	1
第2章 調査の経過	1
第3章 調査体制	3
第4章 調査の方法	3
第5章 地理的環境・歴史的環境	4
第6章 遺構の概要	7
第7章 遺物の概要	7
第8章 まとめにかえて	13

挿 図 目 次

第1図	原川城跡・坂尻遺跡位置図 (1 / 50,000)	2
第2図	原川城跡・坂尻遺跡分布図 (1 / 2,500)	2
第3図	発掘調査区全体図	5
第4図	調査区内セクション	6
第5図	出土遺物実測図 (1)	9
第6図	出土遺物実測図 (2)	10
第7図	出土遺物実測図 (3)	11
第8図	出土遺物実測図 (4)	12

図 版 目 次

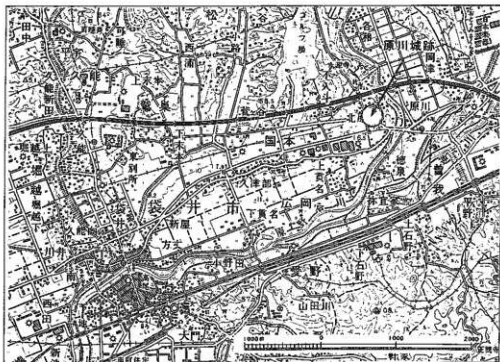
図版1	(A) 原川城跡航空写真 (掛川市域より望む)
	(B) 原川城跡航空写真 (南側より望む)
図版2	(A) 埋土・表土除去作業
	(B) ビート層上面の精査
図版3	(A) 土器集積遺構001発掘状況
	(B) 土器集積遺構001土師器・須恵器出土
図版4	(A) サブトレンチ発掘状況
	(B) サブトレンチ内出土木材

第1章 発掘調査に至る経過

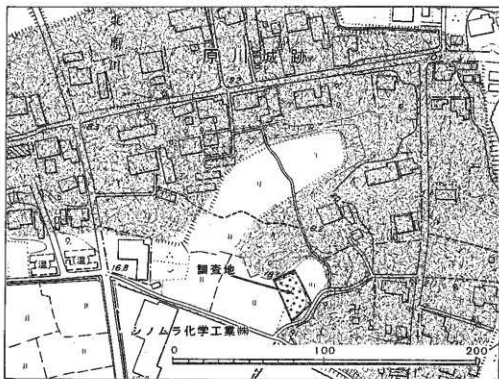
昭和62年度に地主の三浦晃氏より、袋井市国本地内の所有地内に個人住宅に付属する倉庫を建設したいとの申し入れが袋井市教育委員会吉岡伸夫学芸員にあった。同地は袋井市遺跡地図・遺跡地名表によると「No.116 原川城跡」、「No.196 板尻遺跡」が重複して所在する場所であった。三浦氏によると、以前に自宅を建設した時は、この地が遺跡内であるということを知らなかったため発掘調査をすることなく建設してしまったが、この周辺地区の開発に伴い国1バイパスの発掘調査や、工場建設に伴う試掘調査などにより、この地が重要な遺跡内であることがわかり、発掘調査をしてから工事にかけたいとの主旨であった。工事予定地は基本的に原川城跡の堀の調査を主目的において実施した。

第2章 調査経過

- ◎5月14日 地主・三浦晃氏宅へあいさつ。
- ◎5月16日 地元の名栗・北原川地区へ作業員さんの手配をお願いする。
- ◎5月23日 用地内に植えられた樹木を三浦氏が移植をする。
- ◎5月24日 ユンボ・トラック3台で盛土、水田土を除去する。
- ◎5月25日 午前中、ユンボ・トラック2台にて水田土除去のつづき。午後から、作業員にてヘドロと化した土を除去。
- ◎5月26日 調査区の南側で、古墳時代の上師器・須恵器を大量に包蔵する土器集積遺構を検出する。調査区の全体図を作成。財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所の篠原修二調査研究員、小柴秀樹調査研究員が現場を見学。
- ◎5月27日 土器集積遺構の精査。清掃後、出土状況写真の撮影。
- ◎5月28日 土器集積遺構はマウンド状になっている。上部より掘下げて第Ⅱ層の調査にはいる。出土遺物のうち土師器は乾燥すると泥が付着して表面の調整痕が剥離してしまうため現地にて水洗いを行う。
- ◎5月30日 フロート付水中ポンプがないため毎朝約60cmの水がたまり排水作業におわれる。堆積した土砂の移動。土器集積遺構では第Ⅱ層の下部に調査が移る。
- ◎5月31日 土器集積遺構では第Ⅲ層に調査がはいる。写真撮影。
- ◎6月1日～3日 土器の取り上げ。実測図作成。写真撮影。
- ◎6月4日 隣接する水田に水がはいる。第Ⅲ層が終了し無遺物層となる。
- ◎6月7日～9日 南側排水溝が崩れ再掘削を行う。写真撮影。中央トレンチの発掘。
- ◎6月10日 静岡県教育委員会文化課 五島康司指導主事が見学。
- ◎6月13日 いたみが激しく現地で取り上げられない遺物は化学処理を行う。
- ◎6月14日～15日 器材の徴収。現地調査を終了する。



第1図 原川城跡位置図



第2図 原川城跡周辺図

第3章 調査体制

◎調査指導 静岡県教育委員会 文化課

◎調査主体 袋井市教育委員会

教 育 長 鈴木 勲 一 (～1988.12)

教育長職務代理者 加藤 昭 喜 (1989.1～)

社会教育課長 井口 育 夫

文化振興係長 小 粥 保 夫

主任学芸員 吉 岡 伸 夫

主 事 建 部 千 代 子

学 芸 員 永 井 義 博 (調査担当者)

◎調査参加者

三 浦 久 雄 海 野 昭 平 岩 崎 良 男 山 崎 荘 一
諸 井 栄 早 川 豊 美 寺 田 矩 江 早 川 保 子
樽 松 光 子 山 下 悦 子

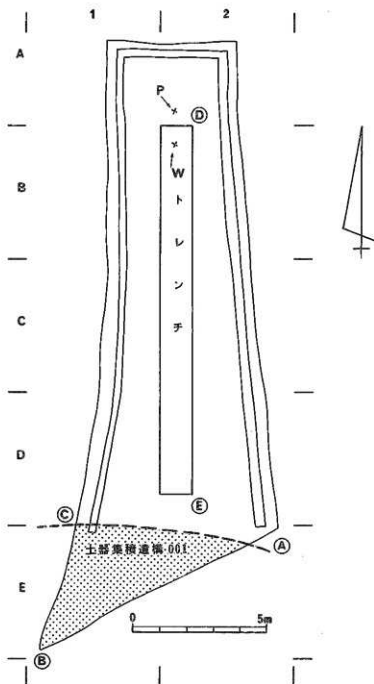
第4章 調査方法

発掘調査は、対象地内にすでに盛り土が行われているため、まず重機とダンプカーで除去し水田面を確認した後、再び水田床土まで除去した。この時点で、すでに調査区南側から土器片が確認されその散布範囲がおおまかに確認された。この時点で、ほぼ北に主軸をとる5mのグリットを任意に設定し、遺構確認、遺物の取り上げなどすべての発掘の基本とすることにした。グリット名は縦軸に算用数字、横軸にアルファベットを使用し、その交差する名称をグリット名とした。たとえば、土器集積遺構001は、E-1グリット、E-2グリットに位置することになる。遺構面直上より作業員の手作業により発掘を行い、周囲は土砂の崩れを防ぐためコンパネを土止め用に張り、その内側に幅50cm、深さ50cmの排水溝を設け調査区の端に水中ポンプを入れて常時作動するようにした。しかし、夜間は周囲の住宅に対する騒音防止のため発電機、ポンプの使用は休止した。検出された遺構は、発見順に001、002と通し番号で呼び100分の1の略側図を作成して、遺構・遺物が交錯しないように処理した。現地の実測図は、20分の1を基本として、設定したグリットを実測のポイントとして利用して作成した。また、遺物の詳細図などを作成する場合は10分の1、5分の1の実測図を作成し対応した。記録写真は、ブローニー判(マミヤRB6×7=1台)と35mm判(ニコンFE=2台)を併用した。撮影には脚立、ローリングタワーを使用した。現地はビート層、泥層を中心とする軟弱地盤のため、埋め戻し用に山砂利を入れ、旧水田と同じレベルとしてから地主に土地を返却した。

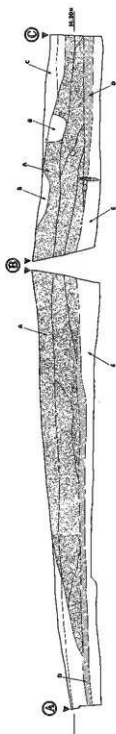
第5章 地理的環境・歴史的環境

原川城跡・坂尻遺跡は、袋井市街から国道1号線を約5km東進した掛川市と境を接する袋井市国本本地内に位置している。ここは、袋井市村松にある名利、医王山油山寺一帯に広がる可睡・油山丘陵（最高115.2m）の南東端にあたる。この丘陵は、小笠原層（泥層と礫層の厚い互層）とその下に不整合で横たわる曽我層群（下部礫層、中部凝灰質層・泥層・上部砂層）により形成されている。遺跡のすぐ東側には掛川市八高山を源とする原野谷川が古岡の丘陵に沿って南下し大きく西に流れを変えるところである。この変換点あたりは、掛川市から流れてくる逆川、垂木川等の合流点でもある。河川の周辺は肥沃な沖積平野で、砂層、泥層、礫層が交互に厚く堆積しており、上流の山地で掛川層群と呼ばれる上部新第三系泥砂礫層からなる低地性丘陵を解析した結果である。現在の坂尻遺跡の周辺を流れる原野谷川は、河川改修によって南北向きに直進するが、原川・徳泉・上貫名にはもとの蛇行流路の跡が残っている。蛇行流路の発達には、周辺の川が普段はおだやかな流れであるが、大雨が降ると河川が氾濫を起こし、次々と流路を変えたことを示している。

さて、袋井市国本地区での人類の活動の痕跡としては、縄文時代～弥生時代の遺構・遺物が丘陵の遺跡を中心に確認されている。しかし、最近の大規模開発の結果、周辺の低地においても、弥生時代の中期の遺構・遺物や、古墳時代前期のいわゆる古式土師器を出土する遺跡の調査が多くなっている。古墳時代になると、5世紀代に原野谷川上流の和田岡台地に前方後円墳や大型の円墳を中心とする和田岡古墳群が形成されるようになる。その中でも代表的な古墳として吉岡大塚古墳（前方後円墳）、瓢塚古墳（前方後円墳）、各和金塚古墳（前方後円墳）がある。いずれも、墳丘に葺石が配置され埴輪が置かれた中期の古墳である。円墳では、2段の葺石を巡らせた春林院古墳がある。6世紀にはいると、古墳群は、台地の奥部から丘陵先端に進出してくる。浅間山古墳（前方後円墳）、権現山古墳（前方後円墳）、宇佐八幡境内1号墳（前方後円墳）などが各丘陵の盟主墳となり、それらを取りまくように石ノ形古墳、宇佐八幡2号墳等の円墳が散在している。このうち、石ノ形古墳は坂尻遺跡から約100mの至近距離に位置する直径15mの円墳で、宇佐八幡1号墳、宇佐八幡2号墳も坂尻遺跡より約200mの原野谷川右岸にある。6世紀後半～7世紀にかけて丘陵斜面には横穴墓群が集中的に造られるようになる。原野谷川中流域では、菅ヶ谷横穴、岡津横穴などが坂尻遺跡と関連を持つ遺跡であろう。しかし、この時期は、丘陵上の高塚墳も横穴墓と並行して多数築造されているのを見逃してはならない。平地に立地する集落遺跡としては、調査地南側の国1バイパスの発掘調査で発見された坂尻遺跡がある。坂尻遺跡は、奈良～平安時代の郡衙跡として著名であるが、その官衙遺構の下層より古墳時代の遺構・遺物が検出されている。その状況から、原野谷川の自然堤防により形成された敷高地を集落と考え、それに続く後背湿地を原野谷川の水を引いて水田として営まれた一つの村の姿があらわれてくるのである。しかし、それ以上にこの村は地理的に東国への交通の要でもあり、また原野谷川の水上交通の中継地でもあっただろう。



第3図 調査区全体図



A—B—Cラインセクション



D—Eラインセクション

第4図 調査区内各セクション

第6章 遺 構

今回の発掘調査は、小丘陵の間の小さな谷部分に位置するため、現状は低湿な水田となっており、ちょうど田植えの季節と重なり湧き水に悩まされた。調査地のほとんどが、ビート層と粘土層の厚い互層となっており、水分を多量に含むと、底無し沼の様相を呈しており、その場に立っているのも難しい。検出された遺構は、土器集積跡 001 のみであったが、この土師器・須恵器の混在する“土器捨て場”がたいへん重要な宝の山であった。

土器集積跡 001 ……古墳時代

発掘調査区の南西コーナーから検出された古墳時代の土師器・須恵器と若干の木製品を中心とした“土器捨て場”の跡である。確認されている規模は、東西 8 m、南北 5 m であるが全体の規模は推定直径約 10 cm 程と思われる。遺構の中心は、調査区南側の道路下にあるものと思われ、南側のシノムラ化学工業の工場用地内に所在した集落跡からこの地点を選んで土器が投棄されたものと推定できる。土器からみるとおおむねに三時期の遺物が検出されており、かなり長期にこの“土器捨て場”を使用したと考えられる。シノムラ化学工業の工場用地内は丘陵の山足の微高地上に位置しており、そのあたり一帯に古墳時代は集落が広がり、その西側で現在国道 1 号線の通過するあたりに水田が広がっていた（現況も水田）と推定できる。第 4 図の調査区内各セクションに記載された土層等の説明は、次のとおりである。(A) 土器集中遺構 001 の遺物包含層。遺構内は第 I 層から第 III 層までに分かれる。(B) 攪乱。(C) 水田耕作土。(D) 粘土混じりの黒色ビート層。(E) 白色粘土層。(F) 植物質の強いビート層。(G) 水田の排水用の暗渠跡。(H) ビート層内に埋没した木材。以上の状況となっている。6 世紀前半が遺構の開始期と考えられる。

原川城跡関連の遺構……戦国時代

発掘調査の目的であった戦国時代の遺構・遺物については残念ながら今回は検出することができなかった。調査地付近はビート層と粘土層の互層になっており、谷奥からの湧き水によって、ヨシや雑草等の茂る“底無し沼”の様相を呈して、騎馬の進攻はもちろん、足軽たちでさえ膝まで泥にもぐって前進するスピードを大きく殺されてしまっただろう。しかし、鉄砲の出現と戦国大名の勢力分布の変更により原川城跡の役割は終りを告げ、歴史からその名を消して草木が茂る小山になってしまった。

第7章 遺 物

出土遺物は大きく分けて出土地点、層位より分類すると次のとおりである。

- (1) 表土層（水田土）直下から出土した遺物
- (2) ビート層内より出土した遺物
- (3) 土器集積遺構 001 より出土した遺物

種類としては、古墳時代の遺物では、土師器、須恵器、木製品であり、それ以降の遺物では、中世の山茶碗の破片が若干検出されている。しかし、残念ながら原川城跡に関連する戦国時代（室町時代）の遺物は出土していない。ここではビート層出土の土師器と、土器集積遺構 001 の遺物を中心に紹介したが、この遺構から出土した須恵器は発掘区内だけでも数百点にのぼり、残念ながらこの報告書では資料整理時間・報告書のページ数の関係で、別図の須恵器 19 点、土師器 8 点の紹介でとどめ、その他の遺物については別の機会に紹介したい。

須 恵 器

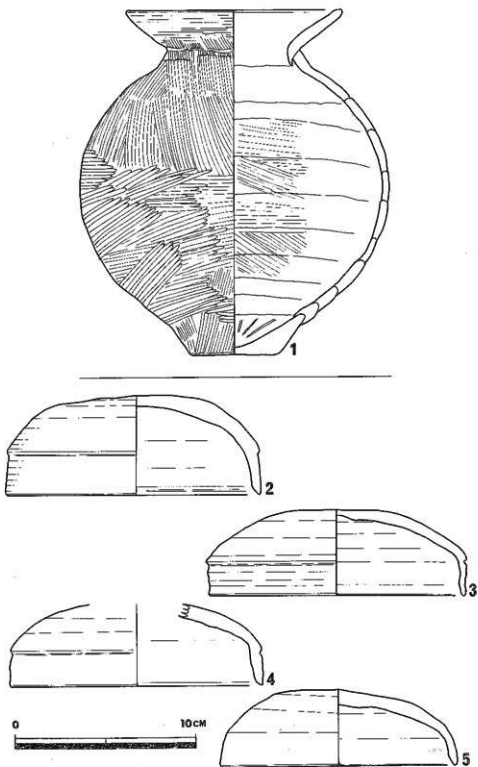
土器集積遺構 001 から出土した遺物は、上記の理由から第 5 図 2～5、第 6 図 1～8、第 7 図 1～7 の合計 19 点を紹介したい。

第 5 図 2～5、第 6 図 1～3 は口径 13～14 cm、器高 4.3～5.5 cm を測る坏蓋である。このうち 2 は、外面は天井部は回転ヘラケズリであるが頂部の調整はあまい。その他の面はヨコナデである。内面は天井部に同心円タタキ文を残しその上をナデ消している。口唇部内側には凹縁が巡っている。3 は口径 13 cm、器高 4.3 cm を測る坏蓋である。稜線より上は回転ヘラケズリである。第 6 図 1・3 は、つまみの付く高坏蓋である。坏身は、口径 11～12.5 cm、器高 4～5.8 cm の第 6 図の 4～8 と、やや小型で口径 10 cm、器高 4.3～3.6 cm の第 7 図 2・3 である。第 7 図の 4 は提瓶の肩部より上の破片で口径 7.5 cm で現存高 5.8 cm を測る。土器の肩部に把手の一部を残す。第 7 図の 5・6 は高坏で、同 7 は小型の埴の破片である。

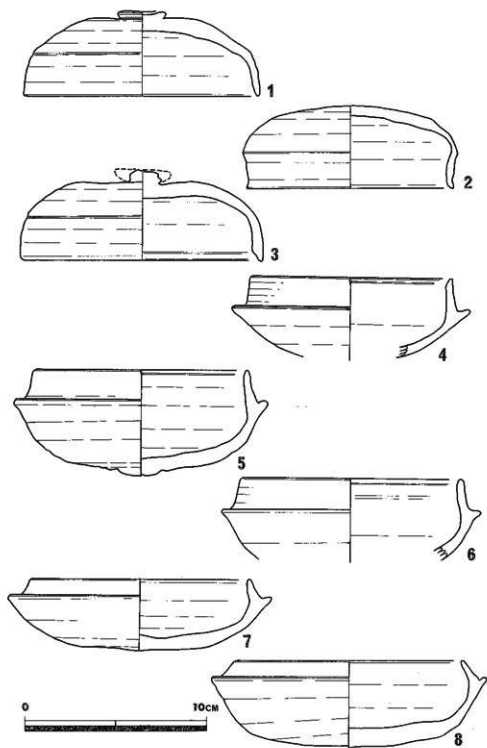
土 師 器

土器集積遺構 001 出土の土師器は、第 8 図 1～8 に図示した。出土した土師器のほとんどが須恵器の形態を模倣したものである。坏蓋 1～3 は口径 13.5～14.5 cm、器高 4.1～4.5 cm を測る。「坂尻遺跡の第Ⅲ期の形態分類表」では、1 が模倣坏蓋 C に、2 が模倣坏蓋 A に、3 が模倣坏蓋 B に対比される。坏身 4～6 は、口径 11.3～12.3 cm、器高約 4.6 cm を測る土師器である。4 は模倣坏身 C にあたり、5・6 は対比できる形態の記載が見当たらない。7 の高坏は分類表の高坏脚 A 2 にあたり底径 10.8 cm、現存高 10.20 cm を測る。8 の高坏は分類表の高坏脚 J 2 にあたり口径 14.8 cm、底径 10 cm、現存高 9 cm を測る。土器集中遺構 001 の場合、出土遺物は正確な計測値ではないが、出土量から須恵器 1 に対して土師器 5 の割合で圧倒的に土師器の占める割合が多い。

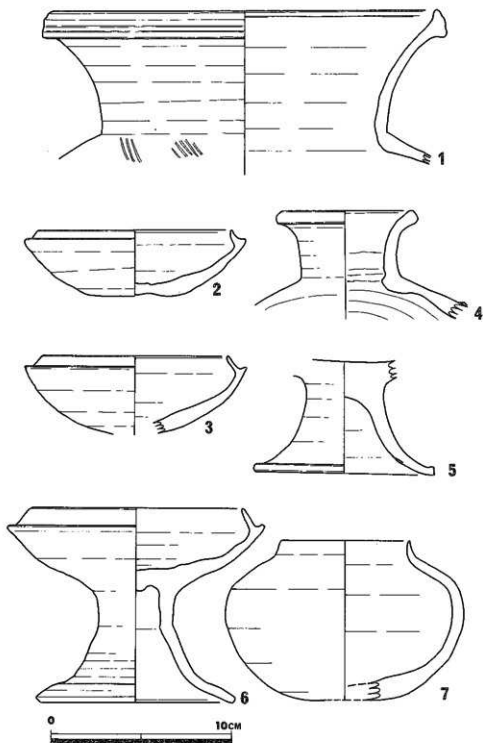
ビート層出土の土師器として、第 5 図の 1 があげられる。この壺形土器は、口径 11.8 cm 器高 19 cm、底径 4.6 cm を測る遺物である。外面は全面タテハケの後、口縁部はヨコナデで仕上げ、胴部は最大径より下はへら状工具による横方向のミガキである。内側には、粘土紐のまき上げ跡を残す上にハケ目が残っている。「坂尻遺跡の第Ⅰ・Ⅱ期の形態分類表」では C 2 a の壺型土器に対比されると思われる。この記述の中の器高 20 cm 前後の中型品と思われる。出土地点は、本報告書の第 3 図の調査区全体図の P 地点であり、水田耕作土直下より検出された。



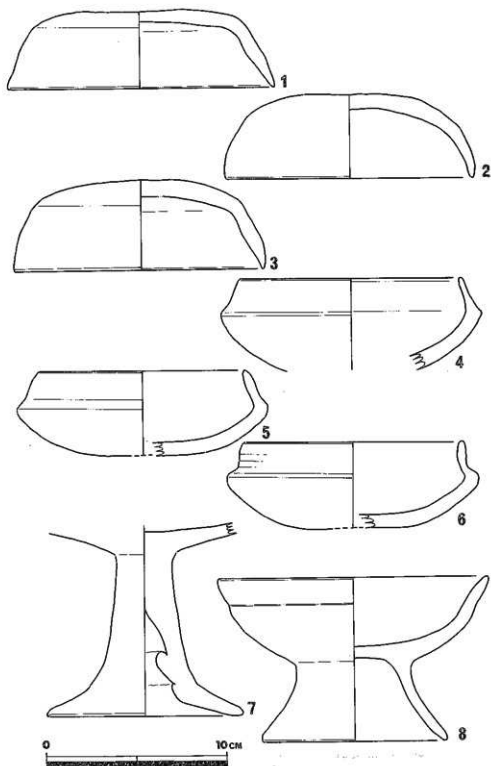
第 5 图 出土文物实测图 (1)



第 6 図 出土遺物実測図 (2)



第7図 出土遺物実測図(3)



第 8 圖 出土遺物実測圖 (4)

第10章 まとめにかえて

今回、発掘調査の対象となった原川城跡は、文龜年間（1501～05）に原川大和守が築城した城で、当時、掛川城にいた今川氏真の西の出城として三河の徳川家康に備えて築かれた。しかし、永祿12年（1569）家康は掛川城を攻め、同年5月、氏真は家康に降伏し、掛塚湊（竜洋町）より伊豆戸倉に移った。これに伴い、原川氏はここ原川城を離れて城東部高瀬村に隠棲することになった。

このように原川城は、古文書等にその名を残すことわずかで、「城」と名が付くけれど実際には最前線の砦、物見櫓のような性格を示すものと思われる。そのため、原川城の性格を明らかにするためには、「縄張調査」や「発掘調査」に頼る部分が大きくなってくると思われる。また、城跡に残る小字名も大切な手がかりとなってくる。城跡内で東から西に通じる道を「中通」と呼び、その西端に「奥屋敷（海野駒進氏宅）」がある。その他の字名には「的場（西郷博志氏宅）」「郷倉」「堀先」「向屋敷」「殿屋敷」「鍛冶屋敷」「住吉」「石ノ形（海野孝子氏宅）」「別所」「宿口」「御林（足立義男氏宅）」「隠居（海野昭平氏宅）」「金光寺（増井益五郎氏宅）」があり原川城関係以外の名称との混同も見られる。原川城跡内の発掘調査は宅地造成に伴い小規模ながら丘陵上で実施されている。遺構としては、土塀や井戸、堀に囲まれた大きな掘立建物跡が検出されている。今回の発掘調査では、低湿地の水田内でありながら掘跡の検出はできなかった。このことから、原川城の南側の一部では防御用に新たな堀を掘削することなく、泥沼の湿地を自然の要害としてそのまま利用していたのではないかとと思われる。

さて、今回の調査で思わず主役を務めることとなった古墳時代の須恵器・土師器は、「一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書 坂尻遺跡一序文・古墳時代編—1985 袋井市教育委員会地」に袋井市東部、掛川市西部の原野谷川中流域の古墳時代の遺構・遺物を含めて考察が掲載されているのでそれを参照されたい。また、『シノムラ化学工業静岡工場内埋蔵文化財発掘調査報告書 坂尻遺跡 1986 袋井市教育委員会』では発掘調査で検出された住居跡に関する報告がされているので併せて参考にしていただきたい。時期的には、田辺編年MT15を遺構形成の開始時期と考えている。

最後に今回の発掘調査の成果としては、古墳時代の坂尻遺跡の北側の状況を示す新たな資料が追加で得られたことが上げられる。とくに、この遺構から出土する遺物は比較的完形品が多く表面の調整跡のよく残った遺物が出土することが特色であるが、狭い調査区の中であるため、遺構の全容を解明できないことが残念であった。しかし、遺構のセクションから検討すると集落のある微高地より集落北側の水たまりに、何らかの理由で使用を中止した土器（土師器・須恵器）を投棄したものと思われる。最後に、器種構成の特色として、土師器・須恵器とも坏身・坏蓋の割合が多いのが注目される。近日中に土器の胎土分析を行い、特に須恵器の生産地について小笠山南麓系の土器か、または湖西系の土器であるか生産地の検討をしたい。

（袋井市教育委員会 永井義博）



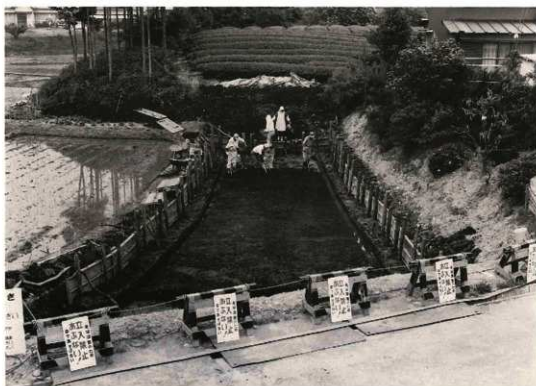
(A) 原川城跡航空写真 (掛川市域より望む)



(B) 原川城跡航空写真 (南より望む)



(A) 煙土・表土除去作業



(B) ビート層上面の精査



(A) 土器集積遺構 001 発掘状況



(B) 土器集積遺構 001 土師器・須恵器出土



(A) サブトレンチ発掘状況



(B) サブトレンチ内出土木材

昭和63年度国庫補助事業
緊急発掘調査報告書

袋井市原川城跡・坂尻遺跡

1989年3月31日

編集 静岡県袋井市教育委員会◎
袋井市新屋一丁目1番の1
TEL 0538 42111

印刷 樹エム・エス・シー
袋井市久能1977の7番地
TEL 0538 423164